

がいてくすまふ

周知のように、米は小麦、トウモロコシと並んで世界三大穀物の一つである。ただし、世界の米の生産量は年間約六億トン弱であるのに対し、その国際市場での取引量はわずか二〇〇万トン程度(精米ベース)であり、生産量のわずか五%に過ぎない。また、小麦やトウモロコシの生産と消費は世界的に広がっているのに対して、米は生産も消費もその九〇%がアジア地域に集中しているのが特徴である。

これまでのコメ問題に関する多数の論著を大別すれば、特定の国や地域の米政策を分析するものと、稲作の経営と技術問題を中心に論ずるものという二つの類型に分けられよう。ところが、本書はそのサブタイトルが「世界の米生産と米貿易」であることから分かるように、世界的視野でアジアの主食であるコメを捉え、稲作の歴史だけではなく、米の国際商品としての実態および主要産米国の生産、消費の現状を解説しているのが特色と言える。本書は七章構成であり、その内容は大きく以下の三つの部分に区分できる。

第一の部分は、第一章「米と稲作」、第二

米…この貴重な食糧

世界の米生産と米貿易

A・J・H・レイサム著

丸山 利夫訳(農林統計協会)

章「灌漑と稲作」、第三章「精米機と精米」の三つの章からなり、この部分ではアジア地域を中心に稲作生産技術の歴史を総括している。ここではアジアにおける米の生産拡大過程について、高収量品種の開発(緑の革命)、灌漑施設の発達(稲作システム)、機械化(特に収穫作業)という三つの点を上げながら分析を行っている。著者は、アジア型小農論」に基づき、稲作の機械化は省力化をもたらしたが、単収の増加をもたらすものではなく、それは最終的には稲作のコスト上昇要因となり、歓迎すべきか否

か微妙な問題」と疑問を提起している。第二の部分は、第四章「貿易と取引」、第五章「仲介業者と貿易業者」、第七章「一九九〇年代の米貿易」という三つの章からなる。この部分では、米貿易の特殊性、米の国際取引の歴史、米貿易の現状等についても、さらにはアメリカ商務省や農務省海外農業局の資料を用いて分析している。この中で、タイの米輸出業者協会(TREDA)、欧米の主要な貿易業者、中国糧油食品輸出入総公司等の大手貿易業者の業務仕組みの紹介と合わせて、米の国際取引手法を実務レベル

で解説している。

第三の部分は、第六章「各国の政策」である。この部分では、世界の主要米生産国の二〇カ国を中心に、その生産、流通およびコメ農政をそれぞれ取りまとめている。そこで著者が最も詳しく説明しているのは中国とアメリカ力である。前者については八頁を使ってこの世界最大の米生産国の生産と流通状況を分析し、中国の米需給の不安定性と国際市場に与える影響を指摘している。アメリカについては五頁を使ってその官民協調型の米政策と様々な輸出制度を紹介している。また、日本については、三頁で米の流通管理制度、生産調整および市場開放問題等を紹介している。

本書は事実の分析が主な内容であり、結論に至る過程でもう少し統計的な裏付けがほしいと感じたところも多い。この点については、著者が米の生産消費から遠く離れたイギリスで生まれ育ったためと考えられ、統計データよりも「ま

ず事実を」というイギリス流の考え方の影響でもある。いずれにせよ、本書は世界の米市場構造と各国の米生産と貿易実態、さらには稲作の歴史を平易に解説しており、今日の世界の米事情を知る格好な書であると思われる。

(一九九九年八月、一六八頁、二、〇〇〇円)
(章 政)